

白道

HAKU
DOU
GAMA

窯

2010

知的資産経営報告書



白道窯

目次

1. 社長から皆さまへ	1
2. 経営哲学	
(1) 経営理念	2
(2) ものづくり指針	3
3. 事業内容	
(1) 信楽焼の特徴	4
(2) 製品マップ	5
(3) これまで手掛けてきた代表製品	6
(4) 生産体制	7
4. 過去から現在	
(1) 当社の知的資産が構築されるまで	8
5. 当社の知的資産	
(1) 知的資産マップ	9
(2) 知的資産① 土と炎を操る技術力	10
(3) 知的資産② 自由闊達な組織風土	12
(4) 知的資産③ 長年培ってきたネットワーク力	13
6. 現在から未来へ	
(1) 今後の方向性（3年後の姿）	14
(2) 3年後の姿を実現するための課題と解決策	15
7. 会社概要	16
8. 問合せ先	17

社長から
皆さまへ

経営哲学

事業内容

過去から
現在へ

当社の
知的資産

現在から
未来へ

会社概要

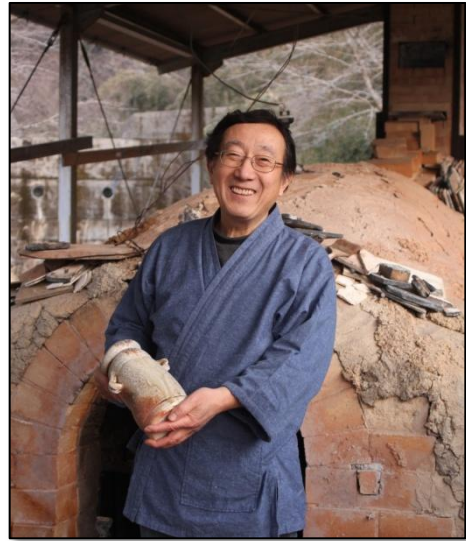
問合せ先

1.社長から皆さまへ

日本六古窯の一つ信楽の地、神山は伊賀の里に隣接し信楽で一番高い山「笹ヶ岳」を擁し、鶏鳴の滝をはじめとする八滝などの風光明媚な山あいにあります。

この地は、茶壺・火鉢をはじめとする大物陶製品のイメージが強い信楽の中にあって、古くから汽車土瓶・神器など小物製品を作ってきた産地でもあります。

この神山で祖先が築いただろう朽ちた古い窯後を整地し、「白道窯」を築窯して40年になります。



白道（はくどう）は黄道（太陽の通り道）と並び月の通り道として、古来より宗教用語で「びゃくどう」とも呼ばれ、火の川と水の川の間にあり、極楽浄土に通じる白い道とされています。

この名に恥じないよう築窯以来、祖先の作陶にかけた思いと、使うことにより生活に潤いを感じていただく「やきもの」作りを日々念頭に励んでまいりました。

ガス窯を主体として、穴窯を使い分け食卓用品、花器を中心に製作しています。製品には手のぬくもりが使い手にも伝わるよう1品ずつ機械ロクロ等は使わずに手作りによる製作を心掛けています。

信楽焼伝統工芸士として、今後も常に新しい「ものづくり」に挑戦してまいりますので、「白道窯」の姿勢に共感していただいた方々とより深い関係を築けることを切に願っています。

平成22年12月24日
信楽焼窯元
白道窯 川口 隆之

川口隆之

2.経営哲学

(1) 経営理念

社長から
皆さまへ

経営哲学

事業内容

過去から
現在

当社の
知的資産

現在から
未来へ

会社概要

問合せ先

経営理念

managerial ideology

「ほんもの」と「求めるもの」が合致
する「ものづくり」にこだわります

白道窯 4つの約束

four promises

その
1

手作りのぬくもり

私たち白道窯は、お客さまに「信楽焼のぬくもり」を感じ取っていただきたいため、手作りにこだわっています。手に取って心地よく、ぬくもりを感じる陶器は、慌ただしい日常にひと時のやすらぎを与えてくれます。また、信楽焼の本来の風合いや表情を作りだすには手作りが一番です。お客さまの生活にほんの少しのゆとりを感じてもらうためにも、私達はこれからも手作りにこだわっていきます。



その
2

商いは飽きない



私達白道窯は、常にお客さまの要望を最優先に商いを行っています。お客さまが求める形状、色、デザイン、風合いなどを、最高の技術でもってカタチにします。また、求められるものを求めるだけ提供するため、1品から中量まで柔軟に生産する体制を整えています。お客さまが「飽きない」ものを作り続けることが、私達の「商い」に通じているのです。

その
3

自由で楽しい職場

私達白道窯は、従業員が自由で、思いのままの楽しい職場づくりに努めています。最低限のルールは当然ありますが、従業員が自ら考え行動できる自由な職場環境が大事だと考えています。これは、土の塊から信楽焼という創造性の高い製品を作りだすためには、何物にも縛られない自由な発想が必要だからです。信楽焼を愛し、ものづくりにこだわった従業員が創り出す製品は、時に芸術品としての価値を生み出すこともあります。創造性、独創性の高いものを創りだすためには、自由で楽しい職場環境は欠かせない要件だと考えます。



2.経営哲学

(2) ものづくり指針

その4

三方よしの精神

近江の土地には古くから「三方よし」の精神が根付いています。古くから伝わる近江商人の理念は、商行為の社会性を大事にし、個人的な要素だけでなく世間への奉仕の精神が強調されます。「売り手よし」「買い手よし」「世間よし」の「三方よし」の精神は、私達白道窯の根底に流れる精神であり、お客さまはもちろん、仕入先、地域の皆さまに感謝される存在であり続けるため、今後も精進してまいります。

近江の土地には古くから「三方よし」の精神が根付いています。



社長から
皆さまへ

経営哲学

事業内容

過去から
現在

当社の
知的資産

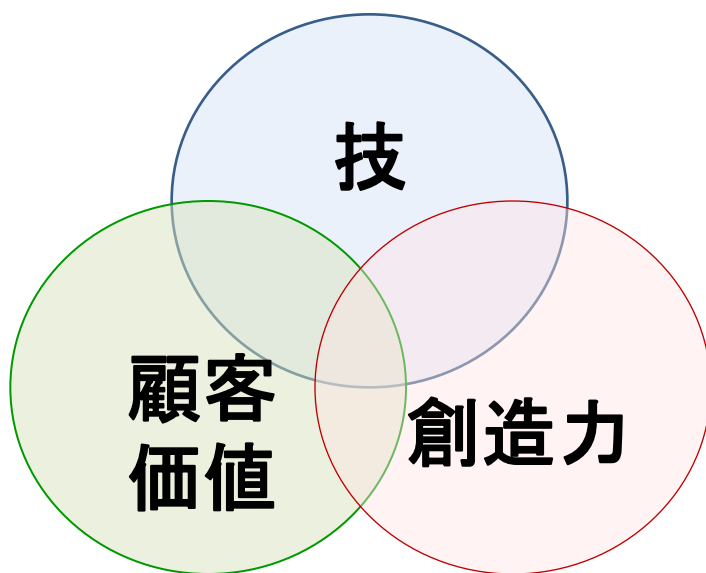
現在から
未来へ

会社概要

問合せ先

ものづくり指針

a manufacturing indicator



私達白道窯は、信楽の地で約40年、伝統の技とお客さまの価値を追求してきました。そこに新たな感性を加えて、創造性豊かな製品を作り続けてきたのです。これからもただ好きなもの造るのではなく、お客さまから認められるものを、最高の技と創造力で創りだしていきます。

■ 極め続けた技

「技を売る」私たちにとって、常にその技を極め続けていくことが大きな使命です。

■ 顧客価値の追求

一方的な価値の押しつけでなく、お客さまの価値に基づいたものづくりに徹します。

■ 無から創りだす力

お客さまの要望をカタチにする創造力を常に磨いていきます。

3.事業内容

(1) 信楽焼の特徴

信楽は、日本六古窯のひとつで1250年の伝統を誇る日本最古の陶器の産地です。その始まりは、天平14年（742年）聖武天皇が紫香楽宮の造営に着手されたときに、布目瓦や汁器の須恵器等を焼かれたことだと云われています。

その後、鎌倉から室町時代にかけて、種壺や榑鉢といった農器が焼かれますが、室町末期に侘び茶が隆盛すると、千利休や武野紹鷗らによってこれまでの農器が茶陶として用いられ、信楽焼はその名を広めていきました。

江戸時代以降は信楽焼が庶民の生活に深く入り込み、さまざまな陶器が生産されます。

今日でも花器、植木鉢、火鉢、食器といった日用陶器から、建築用タイル、陶板、傘立て、庭園陶器など大物から小物まで信楽焼独特の「わび」「さび」の世界を残し続けながら多種多様な信楽焼が生産されています。



日本六古窯

鎌倉時代以前より継続している古い窯の中で、後世大きな産地となった代表的な6つの窯のことで、瀬戸、常滑、越前、信楽、丹波、備前の六窯を指す。朝鮮半島や中国からの渡来人の技術によって開始された近世からの窯とは区別される。

信楽焼の特徴は、土中の鉄分が赤く発色する「火色」や、窯の中で灰が降りかかる灰かぶり現象による「ビードロ釉」の付着、さらには薪の灰に埋まり黒褐色になる「焦げ」も含めた炎が生み出す独特の焼き上がりがあると云われています。これら「古信楽」と呼ばれる信楽焼特有の土味を発揮した、素朴で温かみのある情感豊かなところが大きな特徴と云えます。



「火色」

火色とは、焼成することによって器物の表面に現れるほのかな赤色の発色をいい、主として土に含まれる鉄分の再酸化によって発色します。湿度や焚き方によって微妙に色合いが変化するので、人の力でコントロールできない、予測しがたい変化の様は「窯あじ」と云われています。

「ビードロ釉」

薪を燃料とする穴窯や登窯で焼成すると、器物の表面に薪の灰が降り積もり、さらにその灰が土の中の長石と溶け合って青緑色や黄緑色のガラス質のよどみを作ったり、時にはそれが流れ出して「玉垂れ」と呼ばれる筋目を作ることがあります。こうした窯変を「ビードロ釉」あるいは「自然釉」と呼びます。



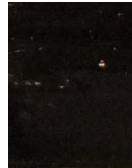
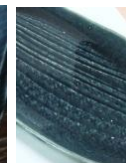
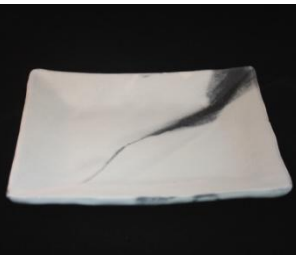
「焦げ」

穴窯や登窯などの燃料となる薪は、燃え尽きるとたくさんの灰を窯の中に積もらせます。この灰が積もる場所に置いた器物は裾の部分が灰に埋まり、この部分に黒褐色をした溶岩のような発色が現れます。これが「焦げ」と呼ばれ、特に茶陶では焦げのついた錆びた色合いが珍重されています。

3.事業内容

(2) 製品マップ

白道窯では、お客さまの要望に基づいてさまざまな「形状」「色合い」「模様」を組み合わせ、カスタマイズ製造いたします。以下の製品マップを参考に、お好みのタイプを組み合わせ、お選びください。

形状							
	皿状	筒状	壺状	鉢状	その他(角状)		
色合い							
	辰砂釉	焼締め	濃紺	白化粧	ベージュ	ビードロ	炭化
模様							
	ヘラ目	石目	はけ目	印花	削ぎ目	くし目	とち目
完成品(例)							
	皿状+濃紺+くし目	皿状+焼締め+ビードロ+削目	筒状+濃紺+くし目				
完成品(例)							
	皿状+白化粧+はけ目	皿状+ビードロ+ヘラ目	鉢状+濃紺+布目				

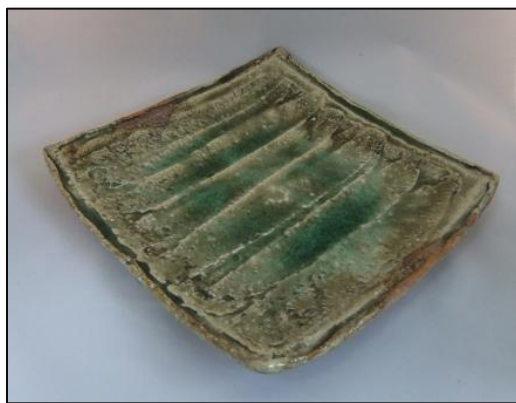
3.事業内容

(3) これまで手掛けてきた代表製品



蚊遣器（かやりき）

第2回いまだき、しがらき、かやりき展（2010年）大賞作品。夏は蚊遣器として、冬は花器として使用できるユニークな発想とデザインが特徴です。



灰釉削目皿

魯山人風の灰釉皿です。中央に削り目を入れることでより躍動感を表現することができました。



灰釉大板皿

第70回信楽陶器総合展（2001年）日本経済新聞社賞作品。灰釉の流れの変化を表現した味わいのある大板皿です。



紅白皿

ブラダル贈答用の紅白皿です。奥深い赤みとやわらかな白みのコントラストが印象的な製品です。長年愛され続けている当社のベストセラー製品です。



焼酎サーバー

自然な風合いの陶器と機械的なコックとが絶妙にコラボした製品です。焼締めで仕上げたサーバーは焼酎をまろやかにする効果があります。



つる付き花器

信楽の山から採ってきた自然の藤つるを使用しています。信楽特有の素朴で温かみのある製品です。

社長から
皆さまへ

経営哲学

事業内容

過去から
現在

当社の
知的資産

現在から
未来へ

会社概要

問合せ先

3.事業内容

(4) 生産体制

社長から
皆さまへ

経営哲学

事業内容

過去から
現在

当社の
知的資産

現在から
未来へ

会社概要

問合せ先

生産工程

production process

	陶土の精製	色合い等に応じて土をブレンドする工程です。粒子の調整や土杵機による土の硬さ、色の混じり具合の均一化等を行います。
	成型	陶土で製品の形を作ります。当社では「たたら成型」と「ろくろ成型」の方法で成型を行います。
	模様付け	陶土が乾かないうちにさまざまな模様付けを行います。模様には、ヘラ目、くし目、とち目、石目、印花など多種多様な模様があります。
	仕上げ	模様付けされた製品の仕上げを行います。フチをきれいに削ったり、底を平らにしたりするなど細かなところまできれいにしていきます。
	化粧掛け	製品の素地に、素地とは違う色の土を溶いてかけたり、塗ったりします。白化粧、泥化粧などの種類があります。
	乾燥	2日～3日位の間、ゆっくり時間を掛けて、製品を乾燥させます。水分を十分に抜くことがポイントです。
	素焼き	陶器を本焼きするための下準備です。600℃～800℃の低温で焼き固め、水分を除き、強度を高めます。
	施釉	素焼きした製品に釉薬を掛けます。釉薬とは陶器にガラス状のコーティングをするための液体で、石灰、土、着色剤などで構成される。
	本焼き	釉薬を掛けた製品を高温で焼成します。約17時間から20時間かけて1300℃くらいの温度で焼き上げます。
	検品・仕上げ	製品にひび割れやピンホール等がないか検品します。また、水漏れ防止剤を塗布するなどの仕上げ加工も施します。

保有設備

possession facilities

穴窯 	ガス窯 	土練器 	ろくろ 
--	---	---	--

4.過去から現在

(1) 当社の知的資産が構築されるまで

社長から
皆さまへ

経営哲学

事業内容

過去から
現在

当社の
知的資産

現在から
未来へ

会社概要

問合せ先

Before

修行期

1965年～

地元の高校を卒業後、信楽窯業試験場にて陶芸を学び、陶器メーカーで修業後、当社の前進である生素地会社を経営し、現在の下地を得る。

- 1965年 滋賀県立信楽高等学校を卒業し、信楽窯業試験場にて陶芸を学ぶ。翌年ろくろ科を卒業し、陶芸の道に入る。
- 1966年 陶器メーカー従事、生素地会社経営を通じて、陶芸の技を磨いていく。この頃の経験が創業後の発展のバックボーンとなる。
- ～1982年

1st

創業期

1982年～

陶器メーカー、生素地会社で修業した後、独立を決心し、信楽町入ヶ谷にて「白道窯」を設立する。顧客要望へのきめ細かな対応や作品の出展などの地道な活動が徐々に認められる。

- 1982年 滋賀県信楽町入ヶ谷にて「白道窯」を築窯し、陶器の生産を始める。
- 1987年 業容の拡大を図るため、ガス窯（1号炉）を築炉する。
- 1989年～ 地元を中心に展覧会等に出品、徐々に陶芸家として頭角を現す。

2nd

成長期

1995年～

顧客や地元からの支持を得るようになると、2号炉、3号炉とガス窯を築炉し、少しずつ業容は拡大する。また、その作品の良さが認められ、信楽陶器総合展にて読売新聞社大阪本社賞を受賞するなど、陶芸家としての存在を確固たるものにす。

- 1995年 業容拡大のため、ガス窯（2号炉）を築炉する。
- 1998年 第68回信楽陶器総合展において、読売新聞社大阪本社賞を受賞する。
- 2000年 業容拡大のため、ガス窯（3号炉）を築炉する。
- 2001年 第70回信楽陶器総合展において、日本経済新聞社賞を受賞する。

3rd

発展期

2001年～

業容も安定し、順調に発展を遂げる。また、数々の賞を受賞し、信楽焼総合部門の伝統工芸士に認定されるなど、名実ともに陶芸家としての地位を確立する。一方で、数々の作品を寄贈するなど、陶芸を通じて社会に貢献する活動も行う。

- 2006年 信楽焼総合部門にて伝統工芸士の認定を受ける。神戸新聞歳末助け合い美術展に作品を寄贈する。
- 2007年 鹿児島県で開催された伝統的工芸品大会に参加する。神戸新聞歳末助け合い美術展に作品を寄贈する。
- 2008年 第78回信楽陶器総合展にて優秀賞を受賞する。岐阜県で開催された伝統的工芸品大会に参加する。神戸新聞歳末助け合い美術展に作品を寄贈する。
- 2009年 京都府で開催された伝統的工芸品大会に参加する。神戸新聞歳末助け合い美術展に作品を寄贈する。
- 2010年 信楽で開催された第2回かやりき展にて大賞を受賞する。神戸新聞歳末助け合い美術展に作品を寄贈する。

5.当社の知的資産

(1) 知的資産マップ

知的資産

Intellectual assets

当社がこれまで蓄積した知的資産は以下の通りです。

知的資産①：土と炎を操る技術力

知的資産②：自由闊達な組織風土

知的資産③：長年培ってきたネットワーク力

これらの知的資産が合わさることで、お客さまの望む製品を作り出すことができるのです。次ページ以降、①から③の知的資産について詳述いたします。



社長から
皆さまへ

経営哲学

事業内容

過去から
現在

当社の
知的資産

現在から
未来へ

会社概要

問合せ先

5.当社の知的資産

(2) 知的資産① 土と炎を操る技術力

陶芸とは情熱と創造力、そして忍耐を持って、土と炎に挑み続けなければなりません。陶器が出来上がるまでのすべてのプロセスにおいて、長年培ってきた技と陶芸に対する情熱が、創造性豊かで実用的な製品を生み出すのです。

社長から
皆さまへ

経営哲学

事業内容

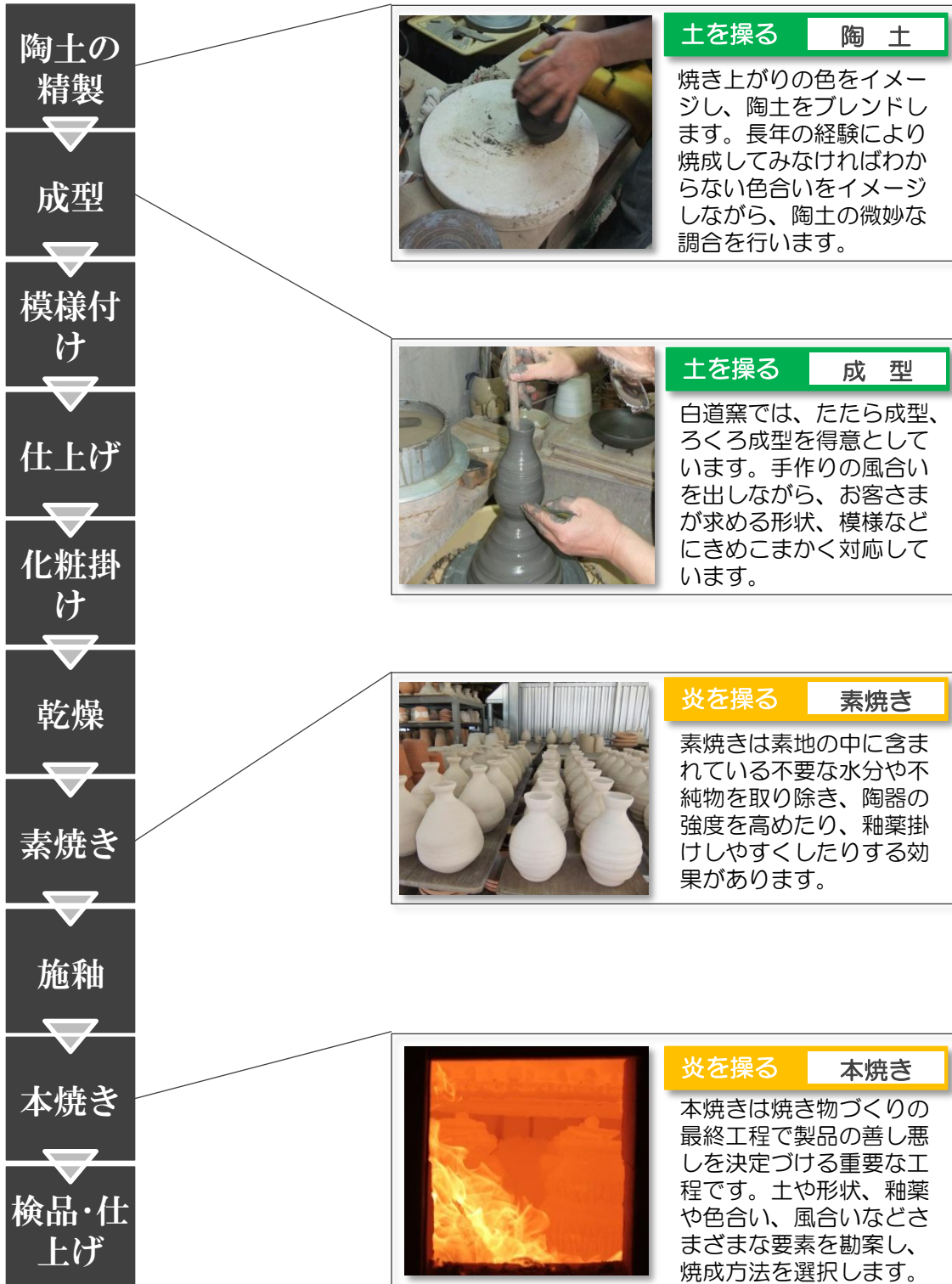
過去から
現在

当社の
知的資産

現在から
未来へ

会社概要

問合せ先



5.当社の知的資産

(2) 知的資産① 土と炎を操る技術力

社長から
皆さまへ

経営哲学

事業内容

過去から
現在

当社の
知的資産

現在から
未来へ

会社概要

問合せ先



穴がま

A hole kiln

白道窯では穴がまを一基保有しています。穴がまは、古くからの窯の一形式で、燃料をくべる燃料室と製品を置く焼成室からなる簡単な構造で、後部には煙突が設置されています。日本では5世紀頃から連綿と続いてきた形式で、陶工によって窯の形はさまざまです。当然焼き方も陶工によって異なり、製品構成や天候、水分等のさまざまな条件によって焼き上がりも異なり、取り扱いは人工窯より難しいのが特徴です。しかし、人工窯では出せない自然釉が織りなす風合いが信楽焼独特の特徴を引き出します。

伝統工芸士

A shigaraki ware folkcraft person

白道窯代表の川口隆之は、信楽焼従事者約750人のうち、たった45人しか存在しない伝統工芸士です。伝統工芸士は、産地固有の技術・技法の研鑽に努め、その技を後世に伝えるという責務があります。伝統工芸士であるということは、極めて専門的な技と個人的な資質を兼ね備えている証であり、白道窯の「わざ」のベースとなっています。伝統工芸士がもつ技が白道窯で従事する者みんなに脈々と受け継がれているのです。



外部評価

Outside evaluation

白道窯の代表である川口隆之は、これまで展示会等へ出品し、さまざまな賞を受賞しています。これは、白道窯の技と創造力が外部に認められた証でもあります。



平成13年信楽陶器総合展
日本経済新聞社賞



平成20年信楽陶器総合展
優秀賞



平成11年信楽陶器総合展
読売新聞本社賞

白道窯

5.当社の知的資産

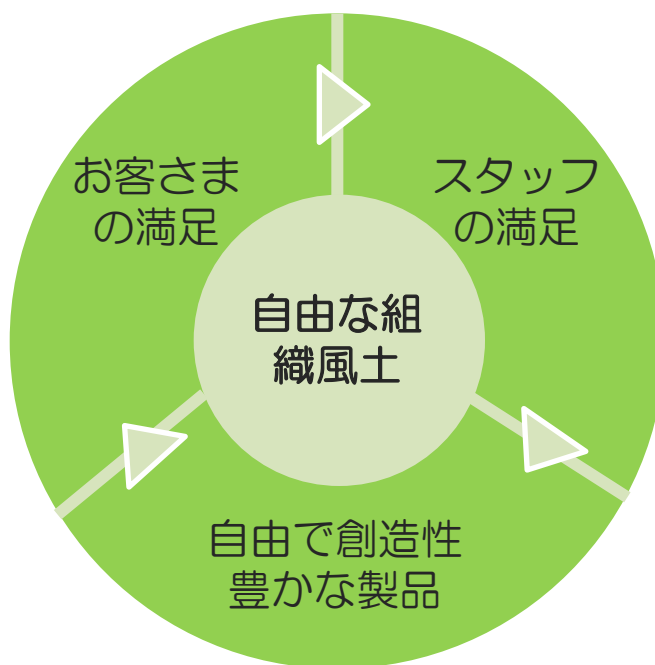
(3) 知的資産② 自由闊達な組織風土

白道窯で従事するスタッフは、陶芸が好きな人ばかりです。陶芸が好きだからこそ毎日陶器と向き合えるこの環境がたまらないのです。

白道窯では、業務に差し支えない程度で、スタッフ自らの作品を自由に制作することが許されています。陶芸が好きなもの同士が集まっている集団なので、自由な発想を大事にする組織風土が根付いているのです。

スタッフが好きな陶芸に自由に触れ合うことで、お客さまが喜ぶ製品ができるのです。スタッフの満足が良い製品を生み出し、そしてお客さまの満足につながる、白道窯ではそのような良いサイクルが生み出されているのです。

白道窯ではスタッフが満足→良い製品→お客さまの満足という良いサイクルが回っています！



白道窯のスタッフがどれだけ陶芸が好きか

1. 自宅に窯を持っているスタッフ：2人/6人（全スタッフ）
2. スタッフ個人の個展開催頻度：1～2回/年
3. 新作数：20～30作品/人
4. 職場での笑顔の回数：無限

社長から
皆さまへ

経営哲学

事業内容

過去から
現在

当社の
知的資産

現在から
未来へ

会社概要

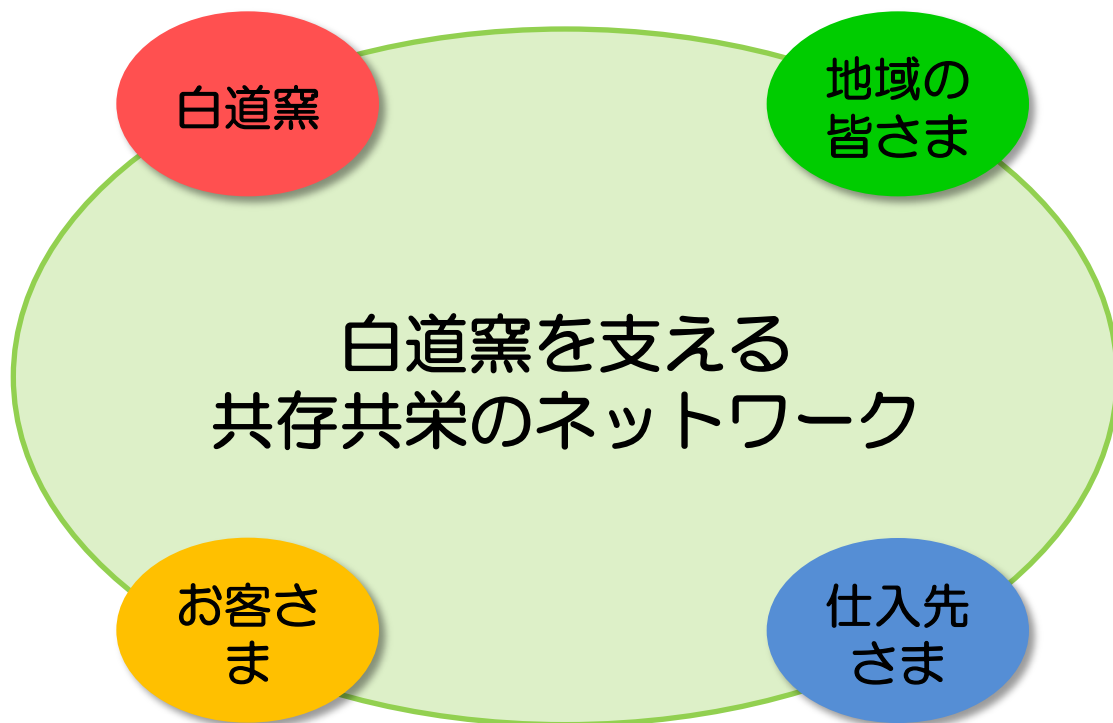
問合せ先

5.当社の知的資産

(4) 知的資産③ 長年培ってきたネットワーク力

長年培ってきたお客さまや仕入先さま、作家の皆さま、そして地域の皆さまとの幅広いネットワークが今日の白道窯を支えてきました。三方よしの精神に則り、個人の利害関係を築いてきたことが白道窯の存在を意義深いものになっていると考えています。

お互いの理解を大事にし、どちらかが得をし、損をするような関係ではなく、共に成長し合える関係であることをこれからも大切にしながら、三方よしの精神を貫き通していきたいと思います。



社長から
皆さまへ

経営哲学

事業内容

過去から
現在

当社の
知的資産

現在から
未来へ

会社概要

問合せ先



白道窯のネットワークを裏付けるもの

1. 仕入先さまとの取引年数：39年（6社）
2. お客さまとの取引年数：10年以上（最高30年くらい）
3. お付き合いのある陶芸作家：20人以上
4. 産地でのネットワーク：知らない人はいない

6.現在から未来へ

(1) 今後の方向性（3年後の姿）

市場・顧客の状況

situation of the market and customer



プラスとなる市場・顧客などの要因

- ・景気が低迷基調にある中、一般消費者の消費動向は「低価格」を嗜好する傾向がある一方で、「こだわり」に対しては「多少高いお金を払っても良い」という傾向も共存しており、価格の高低に関わらず、良いものにはお金を払う傾向がある。
- ・かつての大量消費時代とはことなり、消費の多様化と個性化が進んでおり、一般の消費者はより自分にあった「こだわり」の商品を選ぶ傾向にある。
- ・成熟期にある陶磁器製食器市場では、自分のライフスタイルに合わない商品は価格の高低に関わらず、受け入れられない反面、自宅での「食」のシーンを楽しむために食器もこだわって選びたいという消費者が着実に増えている。



マイナスとなる市場・顧客などの要因

- ・日本の陶磁器製食器市場は成熟し、低位安定の状態にある。生活必需品として使用される食器は既に飽和状態にあり、破損による買い替え需要では中国をはじめとするアジア諸国からの輸入品が価格の安さと実用性で市場を席卷し、市場全体の価格下落を招いている。
- ・信楽焼の生産額は年々減少を続けており、ピーク時の1992年と比べて約3割程度の水準まで縮小している。そのため、メーカー、問屋の倒産・廃業が相次ぐなど、産地の状況は非常に厳しい。

3年後の目指すべき姿

aim at three years later

信楽焼の窯元として今後も永続的に事業を継続するため、

1. 顧客のニーズに適合した「こだわり」の商品を開発し、
2. 個々の要望に合った形態、数量で提供することで、
3. 一般消費市場に独自の販路を拡大し、
4. 自立した経営を行います。

社長から
皆さまへ

経営哲学

事業内容

過去から
現在

当社の
知的資産

現在から
未来へ

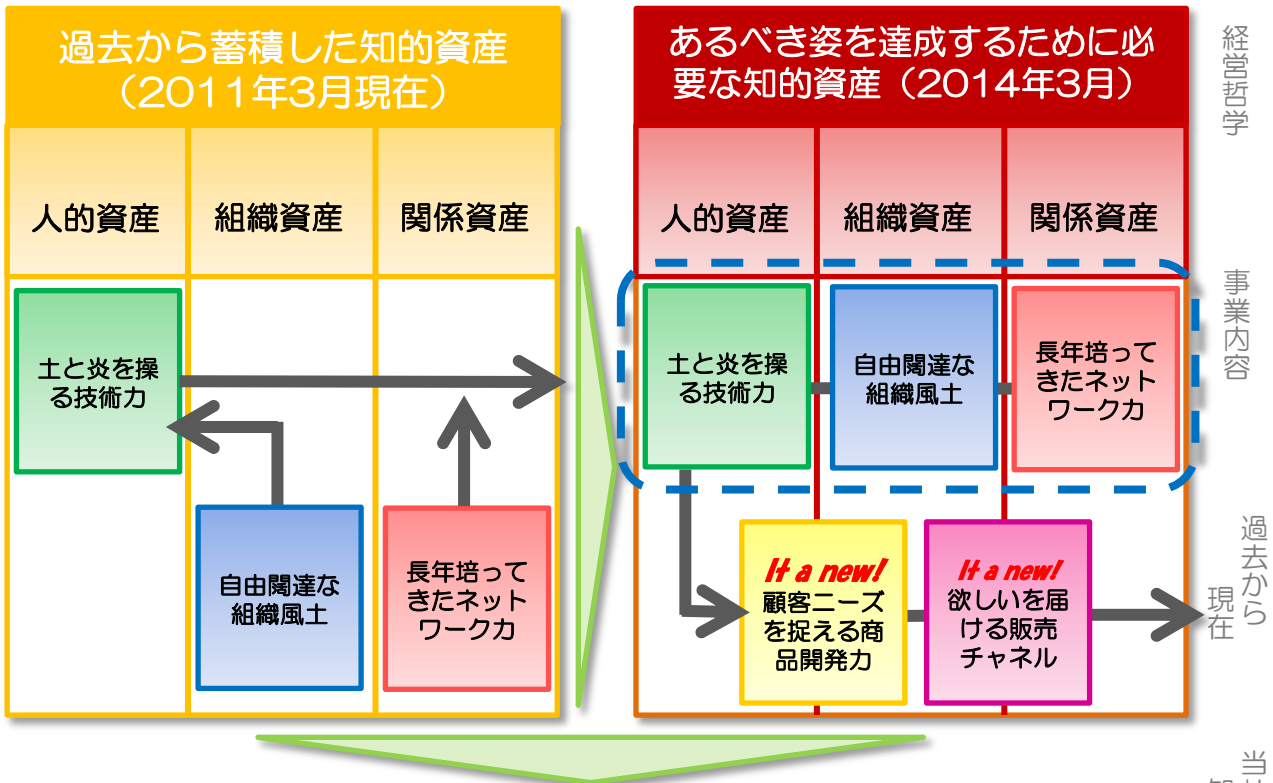
会社概要

問合せ先

6.現在から未来へ

(2) 3年後の姿を実現するための課題と解決策

3年後に保有すべき知的資産



3年後に向けての課題

<商品開発力の強化>

- ・市場の動向と顧客ニーズを的確に把握し、「こだわり」の消費に合致した商品を開発する必要があります。

<新たなチャネルの開拓>

- ・消費者市場への接触を図り、小売店や一般消費者へ直接商品を販売できるチャネルを構築する必要があります。

<技能の伝承>

- ・伝統の技を後世に引き継ぎ、永続的な企業としての礎をつくることが求められます。

解決策

- ①小売りの現場や展示会等へ積極的に向き、市場の潮流や消費トレンドなどの把握に努めます（小売店等の現場視察 1～2回／月目標）。
- ②展示会や商談会に積極的に参加し、販売チャネルを模索するとともに、顧客ニーズや市場動向の把握に努めます（展示会出展 3回／年目標）。
- ③顧客ニーズや市場動向を反映した商品開発に努めます（新商品開発 5点／年）
- ④OJTを中心に前工程の技能伝承に注力いたします（ほぼ毎日実施）。

7.会社概要

社長から
皆さまへ



経営哲学



事業内容



過去から
現在



当社の
知的資産



現在から
未来へ



会社概要



問合せ先



会社名	白道窯 代表 川口 隆之
従業員	6名
事業内容	信楽焼製品の製造・販売
本社	〒529-1812 滋賀県甲賀市信楽町神山1705 TEL：0748-82-2295 FAX：0748-82-2653 E-mail: hakudou@iris.eonet.ne.jp



工房裏の桜と穴窯の風景

8.問合せ先

社長から
皆さまへ

知的資産経営報告書に関する問い合わせ先

白道窯 代表 川口 隆之
TEL：0748-82-2295
FAX：0748-82-2653
Email：hakudou@iris.eonet.ne.jp

経営哲学

① 知的資産経営報告書とは

「知的資産」とは、従来のバランスシートに記載されている資産以外の無形の資産であり、企業における競争力の源泉である人材、技術、技能、知的財産（特許・ブランドなど）、組織力、経営理念、顧客とのネットワークなど、財務諸表には表れてこない、目に見えにくい経営資源の総称を意味します。

「知的資産経営報告書」とは、目に見えにくい経営資源、すなわち非財務情報を、債権者、株主、顧客、従業員といったステークホルダー（利害関係者）に対し、「知的資産」を活用した企業価値向上に向けた活動（価値創造戦略）として目に見える形で分かりやすく伝え、企業の将来性に関する認識の共有化を図ることを目的に作成する書類です。経済産業省から平成17年10月に「知的資産経営の開示ガイドライン」が公表されており、本報告書は原則としてこれに準拠して作成しております。

事業内容

過去から
現在

当社の
知的資産

② 本書ご利用上の注意

本知的資産経営報告書に掲載しました将来の経営戦略及び事業計画並びに附帯する事業見込みなどは、すべて現在入手可能な情報をもとに、当社の判断にて記載しております。そのため、将来に亘り当社を取り巻く経営環境（内部環境及び外部環境）の変化によって、これらの記載内容などを変更すべき必要が生じることもあり、その際には、本報告書の内容が将来実施又は実現する内容と異なる可能性もあります。よって、本報告書に掲載した内容や数値などを、当社が将来に亘って保証するモノではないことを、十分にご了承願います。

現在から
未来へ

③ 作成支援・監修専門家

本知的資産経営報告書の作成にあたっては、本書記載内容につき、その客観性を維持・向上させる趣旨から、次に掲げる専門家のご支援・ご監修を賜りました。

滋賀県中小企業団体中央会 中小企業応援センター事業 登録専門家
中小企業診断士 柳 辰雄

会社概要

問合せ先

信樂燒窯元白道窯

〒529-1812

滋賀県甲賀市信樂町神山1705

TEL:0748-82-2295 FAX:0748-82-2653

Email: hakudou@iris.eonet.ne.jp

